

火星

平成二十六年四月号



七曜抄

(八)

山尾玉藻

にはとりを脇がかへに來雪のひま

雨音に少しづつ煮る雛のもの

春一番近江は水のいろを立て

亀池に寒の戻りのとどまれる

蜥蜴穴出で菅公の日向あり
連翹に遇ひし眼裏こむらさき
葬の家の裏に抜きけり春の葱
河内野や田螺鳴かする月の出で
すべらかに障子開きぬ桜鯛
椿の夜父のふところ膨らめる

太白星

福の字の名札立てある福寿草
鷹匠の腕直角に鷹飛びぬ
水に影置き白鷺のひるがへる
枝動く音のかすかや寒雀
九十の友ふたりゐる竜の玉
駅弁や雪山を見つ海を見つ
六甲の端に住まひて春炬燵

杉浦典子

浜口高子

星 生 る 雪 に 兎 の 跳 ね し 跡
葎 蔵 の ゆ つ くり 開 く 淑 気 か な
み どり 児 の 泣 声 運 ぶ 恵 方 風
初 売 の 声 跳 ね 返 す 氷 か な
新 巻 に 包 丁 窮 す ひ と り な る
隠 国 の 雪 虫 に 手 を さ し の べ し
淡 雪 の 向 う 朝 の 月 の 舟

火星作品

山尾玉藻選

霜柱踏み来る音のみだれけり

宝塚山田美恵子

赤子泣くたびにかがよふ福寿草

薺野や身にそひきたる奈良言葉

裸婦像の眼ざしに雪しづりけり

飯の香に夕昏ぬくき五日かな

八幡坂口夫佐子

杉の葉の肩に降りきし御慶かな

あたりしづめし山門の垂り雪

寒晴や触れあふことのなき暇

竹藪に動く影ある寒九かな

陪塚のさかしまに映ゆ壕の凍

三山に気球とどまる初景色

枯蓮の日向を去にし獅子頭

大和郡山城孝子

お年玉あんちくしやうが呉れにけり

包丁の匂ふ三日の母の家
 月の出にこゑ高まり来寒念佛
 よきことの余所にあるらし除夜の鐘
 神戸深澤鱻
 枅酒のふちの荒塩初昔
 竹生島の影まろまろと飾白
 七草やちかぢかとおある妻の息
 一月や銜は山を呼びあへり
 浦風の夕べ荒れきし松飾
 宝塚蘭定かず子
 掃初の音裏庭へまはりけり
 餅花の影のふれあふほどの風
 繭の色して切干の乾ききし
 雀らに畦の光れる餅あはひ
 あらたまの空へ大王松咲ける
 松井倫子
 こつぽりの歌ふがごとし大旦
 篁に沿ひくる風の春著かな
 軒ちかく線路カーブす初霞
 垣越えて紙ひかうきの着く冬日

選のあとに 山尾 玉藻

篁に沿ひくる風の春著かな 松井 倫子

赤子泣くたびにかがよふ福寿草 山田美恵子

陽光の恵みを一心に受けて寄り添うように咲く「福寿草」は穏やかな幸福感をイメージさせる。この季語力で「赤子泣く」という襲の事実を新年らしい晴の世界へ昇華させている。

杉の葉の肩に降りきし御慶かな 坂口夫佐子

杉山のかかりで出会った人と新年の挨拶を交しているのだろう。思いがけず杉の葉がはらりと肩に降りかかり、芳しい香が辺りに漂う。鄙びた安穩の景が印象的である。

お年玉あんちくしやうが呉れにけり 城 孝子

「あんちくしやう」は愛情の裏返し表現。この明快至極な表現で二人の密接な間柄を窺い知ることができ、同時に作者の思いがけない喜びがストリートに伝わってくる。

七草やちかぢかとある妻の息 深澤 鱧

夫婦は互いに最も身近な存在でありながら常はそれを忘れ勝ち。息遣いに至っては意識すらしないものだ。しかし齋粥を啜り合いながらふと妻の存在を意識した作者である。齋粥の土の香が作者に原点を思い出させたのかも知れない。息は存在以外のなものでもない。

繭の色して切干の乾ききし 蘭定かず子

対象を見つめた結果、作者は「繭の色して」の不思議を得た。驚きを得た。それは発見ということに他ならない。

篁の横を来る春著の袂が強風で千切れんばかりに翻る。予定された美意識では決して描けぬ真を垣間見せる一句。

寒月をふりきり夜行寝台車 大山 文子

夜行寝台車に乗らなくなつて久しいが、何時になつてもひえびえとした佻しさを思わせる列車ではある。「寒月をふりきり」には何かを振り切るような勇みだつところが垣間見え、物語のエピローグのようでもある。

大寒や砂のくぼみに鶏の羽根 山本 耀子

鶏が砂浴びをした跡なのだろうか、単純ながらいかにも寒そうな景。「大寒」に対する思いを具体的に表現し、読者に確かに伝達している。その意味で俳句に大切なのはディテール、俳句はディテールの文芸と言つてもよいだろう。

年の瀬の肩ごしにみる九絵のかほ 小林 成子

体調一メートル程の「九絵」はぎよる目でぶ厚い唇の受け口をしていて、奇怪な風貌である。年末、まるまる一尾が店頭で寝かされ、そこに人垣が出来ているのだろう。作者も好奇心から人の肩ごしに九絵の貌を覗いたものの、少々気後れした様子である。

半纏の肩に気負ひやお山焼 河崎 尚子

奈良のお山焼には大勢の勢子が活躍するが、歴史的行事であるだけにその責は重いだらう。半纏を着たこの勢子は恐らく経験の浅い若者であらう。「肩に気負ひ」の発見が楽しい。(以下略)

同人 I

川端俊雄

恒星圈

加古みちよ

山眠る麓アクセル踏んでをり
人日やCT検査にも慣れて
めでたさの蝦も入れたり雑煮椀
天上は神のふるさととんど焼く
竹爆ぜてとんどの火入れ式終へぬ

河崎尚子

とんど火の空の向うの風の空
お山焼の祝詞に夕日落ち行けり
山焼の近づく枯を鷲の影
積まれある割木匂へり頬かむり
椿に雪のこりて母の逝きにけり

冬ひばり畝傍香久山入れ替はる
薄紅にけふる山中芽吹まへ
火の気なき骨正月の登窯
冬萌の光へ向きて窯の口
神苑に鶏の遊べる春隣

小林成子

杉の間の日差しひとすぢ初神楽
まほろぼの寒の花火を仰ぎけり
お山焼の駅に降り立つインバネス
頂にひと浮かび上ぐお山焼
冬萌のくぼみくぼみに鹿の糞

坂口夫佐子

紙と筆えらぶ二日の日ざしかな
たつぷりの日ざし掃き寄せ初箒
椅子ひとつ埋まらぬままや七日粥
女正月遊覧馬車をきしませり
着ぶくれておだまきの木のいはれなど

獅子座

山尾玉藻推薦

林 範 昭

中尾安一

告げられし余命一年寒椿
わが身より抜け出したき夜霜降り
尿瓶よりはるかなる音冬銀河
服薬のかすかに震へ寒の水

涼野海音

返り花とは一輪が切手ほど
三人で木椅子を運ぶクリスマス
元日のひかり吸ひ込むシュレツダー
初夢の後のつめたきヘルメット

西村節子

万歳やえぼしの額を打ちもせり
眼の合うて若き脇僧咳きぬ
雪もよひ父にココアを練りぬたり
探梅のうしろ姿の日当れる

井上 淳子

福助の膝の上の塵去年今年
遠峯にまだ雪あらず都鳥
春寒し寄宿舎にピザ届きけり
紺屋川を松葉流るる淑気かな
古巢より雨のしづくす玉子酒
初風をはらむ幔幕にほひけり
ふんぱつの神戸牛肉女正月
をさなごの手の届かざる団子花

西村 裕子

遮断機に足留めされし春著の子
鳥声を聞きとむる眼や粥柱
関東焚あふるるほどに煮てふたり
女正月アールグレイとマカロンと

藤田 素子

初雀けちらしてぬし子のくさめ
冷蔵庫かすかにうなる去年今年
歓声に震へやまざる冬すみれ
冷凍庫に鯛焼眠る春隣